
もう一つの時間軸

C - L · CharLotte

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの時間軸

【著者名】

N Z ノード

N 8924 Y

【作者名】

C - L - Charlotte

【あらすじ】

あつ、あらすじなんてないんだからねつ！／＼／＼

魔法少女×とある系×オリキャラ

どいつも、マリリってほむられた人食い魔女です。
あれですね、おつこバージョンだとマリもそこそこやつつけられるんですね、残念。

初回はただの被害妄想でやつていろいろかと思いましてー。えへへー。
なにせ、オリキャラの作りすぎでもう何がなんだかよく分からない
状態なんですよ。
しかも学生で勉強の内容が入らないというトラブル。

変な話はさておき。

、魔法少女まどか マギカ×とある系×シャルのオリキャラ、で暴
れます。

実際場所は学園都市であり、いわゆるクロスオーバーですね、分か
ります。((
((

まだシャルは半人前なので、温かい目で見てください。目の捕虜
程度で。

えーっと、原作キャラで使うのは・・・

魔法少女：暁美ほむら、キュウベえ、オリキャラ、多分魔女&使い
魔＆鹿目まどか

とある系：原作キャラ全般

でも、まあ、とある系は結構限られた人物が出てきます。

杏子とさやかとマリさんはある事情により見滝原に居残りです。

魔法少女VS科学（多分魔術）、「どちらが勝つのでしょうか？」
(実際魔法少女組はキュウベえ狙いですが・・・うふふ・・・)

では、使うオリキャラ紹介といきましょう。

(○・・○)ノ++++++、(○・・○)

名前：綾瀬 ルカ（あやせ るか）

年齢：14歳

性別：女

性格：とても冷静で、語尾に「？」を付ける。いつも笑っている。
たまに目が笑っていない()

一人称：「ウチ」

姿

私服：[http://image2.atgames.jp/se1fy.swf?&accef=10498094&hair=10407305&face=10411164&accen=10485211&top=1048540704&bg=10557726&bgF1g=1](http://image2.atgames.jp/se1fy.swf?&accef=10498094&hair=10407305&face=10411164&accen=10485211&top=10485274&bg=10557726&bgF1g=1)

制服：[http://image2.atgames.jp/se1fy.swf?&accef=10498094&hair=10408452&accf=10498094&hair=1040](http://image2.atgames.jp/se1fy.swf?&accef=10498094&hair=10407305&face=10411164&accen=10485211&top=10557726&bg=10408452&accf=10498094&hair=1040)

7305∓face=10411164∓acc
eh=10443912∓top=10407474&a
mp;bg=10557726∓bgFL1g=1

イメージカラー：茶色

武器：サイドスライサー（魔法少女の時以外にも出したりはできる）
魔法：学園都市での能力は大能力者に匹敵する風力使い（エアロシ
ューター）。

魔法は圧力魔法。「重圧力」^{アイドル}という名称で学園都市は通つ
ている。

声：少し違和感があり。

契約内容：「強くなりたい」

原作キャラとの関わり：ほむらとは結構いい感じの仲。ほむらから
も信頼されている。

その他：ほむらが時間歩行者だと知っている。

（○・・○）ノ++++++＼（○・・○）

結構設定多いでしょう（キリッ

では、プロローグでお会いしましょう。

（ - - ）

プロローグ

魔法少女 晓美ほむら

「うーじーなの、キュウベえが逃げたといつ場所は。」

魔法少女 綾瀬 ルカ

「うん。間違いないよ?」

とある都市、「学園都市」

「それにしても、珍しい所ね。」

「君は学校があるだろ?ウチが行くよ?」

「あら、いいのかしり。」

「いいよいよ?どうせ不登校のウチだし?」

「なら任せやるわ。」

そういう残し、ほむらは姿を消した。

「任せられた?」

普通なーじの交わらないーこの物語、

上条当麻がいる学園都市と、ほむらがいる見滝原が唯一交わった。

これは、時間歩行者・暁美ほむらが体験したもう一つの語られていない時間軸・・・

第一話「学園都市」

東京西部に位置し、東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る完全な円形の都市。

総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人、その8割は学生である。

それぞれ特色のある23の学区から構成されており、それぞれの学区で独自の条例が、

学園都市の法律とは別に制定されている。

完全に内陸部に位置し海には面していない。唯一の山岳地帯である第21学区を除き、基本的に平坦な地形で緑地は少ない。外周は高さ5m・厚さ3mの壁に囲まれ、完全に外部と隔離されている。

それが、学園都市。

「げつ・・・ビリビリ・・・」

変わらない日常。

「誰がビリビリ?」

変わらない人々。

変わらない、何もかもが。

「ちよつと待ちなさいよーー!」

「逃げるが勝ちっ・・・！」

その、変わらない、が反転される・・・

第一話「遭遇」

「やつと逃げれた・・・」

学園都市に住む少年、上条当麻。

どこにでもいるような平凡な高校生だが、その右手には生まれつき「幻想殺し」という力が宿つており、その性格や不幸体質によって様々な騒動や事件に遭遇するのが特徴の少年だ。

だが、レベルは無能力者、つまり、「〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九」。

以上だ（異常）。

ツンツンした短めの黒髪をしており、それ以外に何これと言つて特徴が無い平凡な容姿。

この平凡な少年が何故このような遺言をしているのか。

それは・・・後ほどとこう事で。

「はあ・・・不幸だ・・・。」

これが口癖。

毎回なにかがあると「不幸だ。」と言つて。

そして、この少年が次に巻き込まれる事件とは・・・
これも後ほど。

それでは、本編に戻します。

上条当麻は学園都市をふらふらと力なく歩きそうな勢いで歩いていた。

かれこれ不幸なことに巻き込まれ、拳句ずつと走つていこまできたのだから。

「またインデックスに何か言われそうだな・・・。」

インデックス、本名は不明で正式名称はIndex - Librorum Prohibitorum。

禁書目録。

イギリス清教に所属するシスターにして魔術師の少女。

10万3000冊の魔道書を記憶している「禁書目録」という過酷な役割を担つている。

本名、年齢等のパーソナルデータは一切不明である。

語尾に「 - なんだよ」 「 - かも」を付けた口調で喋る。

まあ・・・この説明は切り落としましょう。

さあ、一通りの説明は終わりました。

魔法と科学と時々魔術、交わらないはずのものが交わるとき。一つの物語が生まれる・・・。

どうしようかと迷つっていた時、誰かにぶつかつた。

「いてつ。」
「いたつ。」
とある人物から逃げ、途方にくれた上条当麻。
彼が行く先は決まっていない。

そこには、ぶつけた肩を手で摩る少女が目に映つた。
歳は自分より少し下で、髪がウェーブ状になり、上で括つている。
見たことの無い制服だ。

だが、どこかの誰かさんに少し似ていた。

「大丈夫、ルカ。」

肩をする少女の隣には、もう一人少女がいた。その少女も自分より少し下で、黒髪のストレート。

どこかやる気の無い目をしている。

「あー、うん？ウチは大丈夫だけ？」

「ウチ、という少し変わった一人称のルカと呼ばれた少女は当麻を見た。

「お兄さんは大丈夫だつたかい？」

お兄さんと言われ、少し同様したが。

「あー、大丈夫といえば大丈夫だが・・・。」

「そう、ならいいわ。早く行きましょう。ルカ。」

黒髪の少女が冷たくそう言つと、当麻の横を通り過ぎた。

「そう冷たくならないでよー？ほむらー。」

黒髪の少女の名前はほむらといつ少し変わった名前らしい。肩をぶつけたルカという少女もほむらという人を追いかけ横を通り過ぎた。

「・・・まあ、いいか。」

そう呟くと、当麻はまた歩き出した。

第一話「遭遇」（後書き）

とうとう遭遇してしまいましたね、ふふつ。

第2・5話「遭遇」（前書き）

ルカ「ウチの出番コレだけ？」

ほむら「馬鹿、まだあるわよ。」

ルカ「そっか？」

第2・5話「遭遇」

（――）

数時間後、家の近くやつてくると、どいからか声がした。

「なあ、金持つてくるつて言つてたよな？」

「だから持つてきましたつて・・・」

「足りねえんだよ！――！」

「ひいっ！」

そこには、集団リンチのような光景が田に入った。

「・・・関係ない方がいいよな・・・」

そういう、帰ろうとした瞬間・・・・

一人の集団リンチをしていた男が勝手に投げ飛ばされたかのようここちらへ吹つ飛んだ。

「ぐあっ・・・・！」

男はコンクリートの壁に押し付けられ、気絶した。

「なつ・・・・つ――？」

男ら全員が拒絶した。

「いーけないんだー、いけないんだー。いーじめはいけないんだー
？」

そこには、今さつきの少女2人がいた。

「！」のアマ・・・何しやがつた！－！」

無償に切れたチンピラ？達が茶髪ボーの女、ルカに向かつて殴りかかる。

変な光景だが、ルカは笑つたまま手を右へ動かした。

そしてまた変な光景、チンピラ全員が右のコンクリートの壁にたたきつけられた。

「あははー、苛めは絶対いけないんだよー？」

ルカは顔は笑つていたが、目が笑つていなかつた。

どちらかといふと、怖い。

「ルカ、ほどほどにしなさい。」

黒髪ストレー一、ほむらが呆れた顔で物申した。

「だつてー、無償にムカついたんだもん。」

コンクリートに叩き付けられ、致命傷をおつた一人のチンピラの腹をルカはボールを蹴るよつに蹴つた。

当たり前だが、男はむせ返つた。

その光景を見て、当麻は顔を引きつかせていた。

「いや・・・お前らの方が苛めの用に見えたんだがー？・・・

とうとう叫んでしまつた。

んつ？と氣づいたルカはまだ笑つていた。

「あー、ゴメンゴメン？いけないもの見せてしまつたね？」

語尾に？をつける変な奴がこつちへ迫る。

当麻が一步下がると、ほむらはそれに氣づきルカをとめた。

「ルカ、時間。」

「あいよー。」

すると、ほむらの方は変な宝石を取り出した。

何をするかと思つたら、ほむらは紫色の光に包まれ、あつという間に変身した。

黒と白を主張とする制服だが、どこかがちがう。
左の腕に円盤をつけていた。

「さようならー、お兄さん？」

ほむらがルカの右手を掴むと、急に消えた。

知り合い？に同じような手口を使う女がいたが、それとは少し違つた。

消え方が不自然だった。

第2・5話「遭遇」（後書き）

ルカ「なあ、ウチ悪役っぽくない？」
ほむら「…………見られた…………」
ルカ「これからどうなっていくんだろうなあ～？」

第3話「転校生」（前書き）

ルカ「潜入したのはいいけど・・・」

「LV、うて何？」

第3話「転校生」

「白井さん、ちょっと来てください。」

そう呼ばれてきたのは茶髪ツインテールの少女だ。自分より一つ年下だろうか、幼さが残っている。

「なんですか？」

「新しく転校してきた綾瀬ルカさんよ。」

「ルカです、宜しく？」

適当に促そう。

「白井黒子ですの。」

白井黒子、かわいい名前だ。」

「ルカさんを色々案内してあげてくれないかな。部屋は此処だから。

「了解ですの、ルカさん。行きますよ。」

「丁寧だな、此処の人は。

「ルカさんの「」はいくつですか？」

「？」

「しつ、白井さんは？」

「私は「」、4の空間移動。」

ナルホド・・・

「ここも適当に・・・

「ウチも「」、4だよ？」

「同じですわね。」

「ふう・・・

「此処は大変な場所だ。」

「この場所がルカさんの寮ですの、まだルームメイトはいないようですね。」

良かつた・・・

「分からぬ事があれば私にお聞きあれ。」

「そうい、白井黒子は立ち去つた。」

「ほお・・・白井黒子。面白い子だね？」

「空間移動はややこしい子。」

「わお、ほむら？」

後ろには私の同僚、暁美ほむらがいた。

「ほむらに勝てる子なんているの？」

「いるわよ・・・」

「でつ、此処の魔法少女は？」

話を切り替える。

「誰独りいなゐわ。」

ふうへん・・・

「それじゃあ、やりたい放題だね？」

第3話「転校生」（後書き）

ルカ「レバ、4つてどのぐらい?...」

第4話「夕方は不思議を連れて来る」

「ナニコレ、ほんとに魔法少女いないじゃん？」

ルカはビルが立ち並ぶ地区のど真ん中にいた。

正式には手元の宝石のような物であるものを探していた。

独り言を喋るルカの姿は目立つが、通り過ぎる人々は関わりたくない一心で何事も無く通り過ぎる。

此処最近、学園都市で人々が無差別に消えていくという事件がおきていた。

特に中学女子生徒。

子供から大人まで幅広くあるが、特に中学女子生徒が多い。その事件を不思議に思ったルカは今その事を探っている。ルカは自分の中学女子生徒であるながら、裏の顔を持っている。何か情報を集めようと、宝石が反応している場所に来たのだが、何も無い。

人通りが多いだからか、音がいろいろと入り混じり耳が痛くなつてくる。

それでもその場所をルカは離れようとしなかつた。もう夕方である。

自分が転校してきた、常盤台中学は門限等が厳しい。だが、そんな事ルカはまったくもつて頭から消していた。今は自分のしたいことをしているだけの少女。まるで家を飛び出してきた家で少女のように。

夕日が沈もうとしている。

そろそろ足が疲れてきたルカは近くのベンチに座った。

「此処の魔法少女は全員消えたって事になる・・・グリーフシード取り放題！？」

ルカが叫ぶと、近くの木から雀が飛んで行き、人々も吃驚してその場から離れる。

ルカの周りは誰もいなくなつた。
だがそれはルカにとつて好都合といふえるものだつた。
しばらく考え、目を閉じた。

強力な魔女・・・

ジエム摘み・・・

幻想殺し・・・・？？？

ハツと目を開けると、あたりは少し暗くなつていた。

好都合。

夜は、あるもの、の活動が活発になる時間帯。

「今日も人慣れしますか・・・」

第5話「抗争」

白井黒子はいつも通り風紀委員の仕事をしていた。

見回り。

此処しばらくな人々が無差別に消える事件を少し探っている。
常盤台中でも、1人の女子生徒が行方不明になつていて。
それは、黒子の同級生であり、少し話したことがあるが結構気があつっていた。

それに、早く事件を終わらせないと、自分の「お姉さま」が……。

「ああ！お姉さまが消えたら黒子死んでしまいますわあ！……」

「しまった……

大声を出してしまい、あたりの人から哀れな目で見られてしまった。
すぐに頭を下げ、空間移動。

黒子の能力は空間移動。
テレポーター

11次元絶対座標を介して、触れた物質や自分自身を移転させる能力。

能力者の総称は「空間移動能力者」。

比較的貴重な能力で、学園都市内では58名が存在する。

その中の一人が黒子である。

移転させた物体は「出現先にある空間を押しのけて」出現するため、
飛ばした物質の強度とは無関係に切断、あるいは貫通などの事象を
引き起こす。

「」で、右前方斜めを見てみると、やや驚かしい。

建物に少しヒビが入り、人だかりが出来、人が吹っ飛んだ。

吹っ飛んだ・・・?

事件だ、と黒子は思いすぐさま駆けつける。

人ごみを搔き分けながら「風紀委員ですのつーどいてくださいませ！」と叫ぶ。

だが、爆発音？や破壊音？、人の声が混ざり合い、黒子の声はあつけなくつぶされる。

やつと分厚い人ごみを抜け出し、事件現場へと足を踏み入れる。

「風紀委員ですの！！」

叫んだはいいものの、光景に圧倒された。

場所はビルとビルの間の路地だろうか。幅は2～3m位で少し広めに感じるが、ビルの所々がヒビが入り、凹んでいる。

だが、何よりも目を引いたのはそんな場所ではなかつた。路地に2～3人の男子が倒れ、その奥では爆発音と煙等で良く見えない人が争つているのが薄つすら見える。

どうやら能力者達の抗争だろう、そう思つたがその思考はあっけなく消された。

煙が消えた所にいたのは、女子と男子1名ずつだ。

男子の方は私服で、どうにも不良というオーラを出している。

能力は爆破能力^{ブロストキネシス}だろうか、彼が指を鳴らすと所々小さく爆発をする。

爆破能力は発火能力と似ているが、構成は少し違う。

Lv.1～2までは物体に火をつけるだけ、Lv.3は物体を爆破させる、Lv.4～5になると何も無い場所でも大きな爆発を起こ

させる。

彼は壁の破片を爆発させていることから「、3の物体発破^{エクスプロージョン}だろ?」
続いては女子のほうだ。

服は制服で、黒子と同じ常盤台中の制服だ。

能力は特に使つていい気配は無い。

ただ、ビルの壁と壁を自由に伝つて爆発を避けている。

まるで映画の一部分を見ているような光景だった。

だが、女子の方は黒子は見たことがあった。

学校で先生に呼ばれ、ある女子生徒を寮の部屋に案内し、少し話した・・・

「綾瀬ルカさん・・・?」

黒子は顔を少し顰めた。

茶色のカールでポニー テール、腰には黒いポーチ、いつまでも笑つている顔。

そう、常盤台中につい最近転校してきた綾瀬ルカという人だった。こんな事している暇はない、早く抗争をとめなけれどと思い、黒子は抗争に割り込む。

「風紀委員ですの! いきます抗争を止めなさい、さもないと・・・」
黒子の手は武器として太股に忍ばせた鉄矢に触れる。
そして、何本か取り出す。

黒子の声は爆発音で消えて2人は聞こえていないようだ。
むしろ、黒子の存在にもみむきもしない。

男子の方はだんだん油断がなくなり、ムキになつている。
それもそのはず、綾瀬ルカの方はのんきにビルを歩くよつと伝つて
いるのだからだ。

黒子も少しずつ胸の奥がざわめき始め、苦痛を感じ始めていた。

「いきます抗争をやめなさい・・さもないとこうなりますのよ!」
いてもたつてもいられず、黒子は鉄矢を空間移動させ男女の衣服に

ダーツのように刺し止める。

男子の方はうまく肩と腕と足計4本を刺し止める事に成功。

女子の方は一本もささつて・・・

「なつ、何で刺さつていないですの！？」

思わず吃驚してしまつた。

今まで何度か外すという失態はしたが、全部を外すというのは初めてだつた。

「あつ、えーと、白井さんだつけ？」

ルカが黒子に気づき、こちらを見る。

なんの能力を使ったのか分からなかつたが、きっとなにか特殊な事をしたのだろう。

ルカはビルを足で蹴り、地面にゅっくりと着地する。

その拍子にスカートが少しちゃれ上がり、白い下着があらわになる。だが、そんなことも気にせずにルカは黒子に少し近づく。

「聞いてよ白井さん、こいつらさあー」

「綾瀬さん何やつているんですの！？」

説教。

そんな言葉が少し思い浮かんだ。

「えつ」

「これは風紀委員の仕事ですの、一般人は手を出さないでくださいの。」

多少きつい言葉のようだが、これは一般人が怪我するのを避けるためだと心に誓つ。

ルカも多少顔が険しくなる。

だが、顔はすぐに笑つた。

「そうですか、それでは私は早く退散しましょ？」

えつ？

「それでは
」

ええつ・・・・?

ルカはそういう残し、台風の様にその場から消えた。
黒子は多少戸惑いつつルカを追うようにした。
だが、自分は後ろの光景を思い出し、追うにも追えなかつた。
黒子は深くため息をついた。

・・・・ビリかの誰かさんとてこいる・・・。

おはいんにあはんわ。

こーーです。

えー、あけますたおめでとうござります。
また年をとるのか・・・。

そしてつ、この「もう一つの時間軸」。

実際一切喝采忘れていました／（^_^）＼

そろそろ本気でふざけたいと思します。（・・・）

綾瀬ル力を見失い、抗争の片付けでそろそろ寮の門限が着てしまいそうな時間帯。

第7学区の寮に向かう白井黒子は歩きながら夕暮れ近い空をある人を思い出していた。

そう、あの愛しながら美しいお姉さま・御坂美琴を。

彼女はしばらく寮や学校に訪れてはいない。

どこかまたゲコ太ストラップを求めて行つていいのだろう。ルームメイトの黒子にとつて、いや、恋人の様な関係（美琴はどうでもいいと思つていい）の黒子にとつて、美琴がいなのは不倫を発覚した彼氏彼女の気持ちと一緒に。

不意にため息をつき、「お姉さま……」と空に向かって呟く。

茜色の空に美琴の美しき顔が思い浮かぶ。

ふと、正面を見ると風紀委員で同僚の初春が千鳥足でどこかへ向かっていた。

初春の様子から見ると、どこかが変だ。（どちらかといつも変に見えるが……）

よく見ると、初春の周りをみると同じよつこ千鳥足でどこかへ向かう人々ばかりだ。

老若男女問わず色々な人が。

変だと感じた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8924y/>

もう一つの時間軸

2012年1月8日20時47分発行